(一)宮なほかのほのかなりし夕べを思し忘るる世なし。(二)こと〴〵しき程にはあるまじげなりしを、人がらのまめやかにをかしうもありしかなと、(四)あだなる御心には口惜しくてやみにし事と妬う思さるるままに、(五)女君をもか(六)うはかなき事ゆゑあながちにかかる筋の物憎みし給ひけり。(七)「思はずに心憂し」とはづかしめ怨み聞え給ふ折々はい(八)と苦しうてあり(九)のままにや聞えてましと思せど、やむごとなきさまにはもてなし給はざなれど、あさはかならぬ方に心とどめて人の隠しおき給へる人を物いひさがなく聞えいでたらむにもさて聞きすぐし給ふべき御心ざまにもあらざめり。さぶらふ人のなかにもはかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬる限りはあるまじき里までも尋ねさせ給ふ御さまよからぬ本性なるに、さばかり月日を經て思ししむめるあたりはまして必ず見苦しきこと取り出で給ひてむ、ほかより傳へ聞き給はむはい

(一)宮　今年二十八。
(二)二條院ではかつた。
(三)大した身分。
(四)浮氣な匂宮の。
(五)妻の中君。
(六)このやうにつまらないことのために、かうした女に關する方面のことで無闇に嫉妬なさる。
(七)こんな風ではないと思つてゐたのに、情ない女だ。
(八)中君は。
(九)浮舟の身上を匂宮に打明けようかと。
(一〇)薫が本妻としての待遇はなさらないにしても。
(一一)薫がかくしておかれた女(浮舟)。
(一二)餘計な口をきいてお知らせ申上げたならば。
(一三)そのまま聞き流してしまはれる筈の匂宮の御氣質。
(一四)匂宮に仕へてゐる二條院の女房達。
(一五)思ひつめてゐられる浮舟に對しては。
(一六)浮舟のことを他人から聞かれるやうなことがあればそれも困つたことだ。

かがはせむ、(一)いづかたざまにもいとほしくこそはありとも防ぐべき人の御心ざまならねば、(三)よその人よりは聞きにくくなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくてもわが怠りにてはもてそこなはじ、と思ひかへし給ひつつ(五)いとほしながらも聞え出で給はず、(六)ことざまにつき〴〵しくはえいひなし給はねばおしこめて物怨じしたる世の常の人になりてぞおはしける。

(八)かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて、待ちどほなりと思(九)ふらむと心苦しうのみ思ひやり給ひながら、(一〇)所せき身の程を、さるべきついでなくてかやすく通ひ給ふべき道ならねば(一二)神のいさむるよりもわりなし。されど(一三)今いとよくもてなさむとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日數も經ぬべき事ども作り出でてのどやかにがあつてしたことだ。だからしばらく宇治に滯在しなければならないやうな用件でもこしらへて。

(一)薫の方にも浮舟の方にも。
(二)匂宮といふ人は一旦思ひたたれた以上、外から思ひとまらせることの出來るやうな人間ではないから。
(三)自分は浮舟とは姉妹であるから、他人よりも一層外聞わるい目にあふであらう。
(四)自分の怠慢からとりかへしのつかないやうな事態を招くことはすまい。
(五)匂宮の御心を不憫に思ひながらも。
(六)虚言をいつていかにも尤もらしくいひくるめるやうなことはなかなかできない。
(七)嫉妬してゐる。
(八)薫。
(九)浮舟が。
(一〇)窮屈な身の上であるし。
(一一)「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」(伊勢物語)
(一二)そのうち浮舟を好遇しよう(京に迎へよう)。
(一三)浮舟を宇治に住まはせておくのは自分が宇治に行つた時の慰めにしようといふ考へ